

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、1965年の53万トン进行ピークに減少傾向となり、1980年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、1996年には33万トンに増加し、1998年までは30万トン台で推移しましたが、その後再び減少傾向に転じ、2021年は9万トンとなりました。

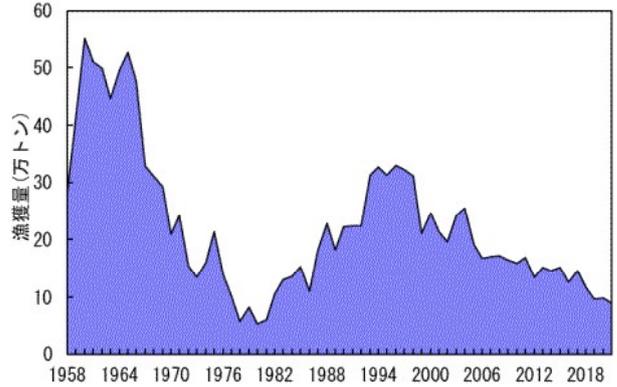


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の2023年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、期間を通じ、串木野沖でマアジ仔、豆、小（0～2歳魚：2021～2023年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、まとまった漁獲はありませんでした。

4港計のまき網では、期全体で222トンの水揚げで、前年の52%及び平年の56%でした。

3. 県内の2023年10～12月期の見とおし

漁獲主体：マアジ豆、小（0～2歳魚：2021～2023年生まれ）

来遊量：前年，平年を下回る。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に漁獲の主体であった0～2歳魚が今後も漁獲の主体となると予測され、前期における中型まき網の漁模様から、前年，平年を下回ると考えられます。

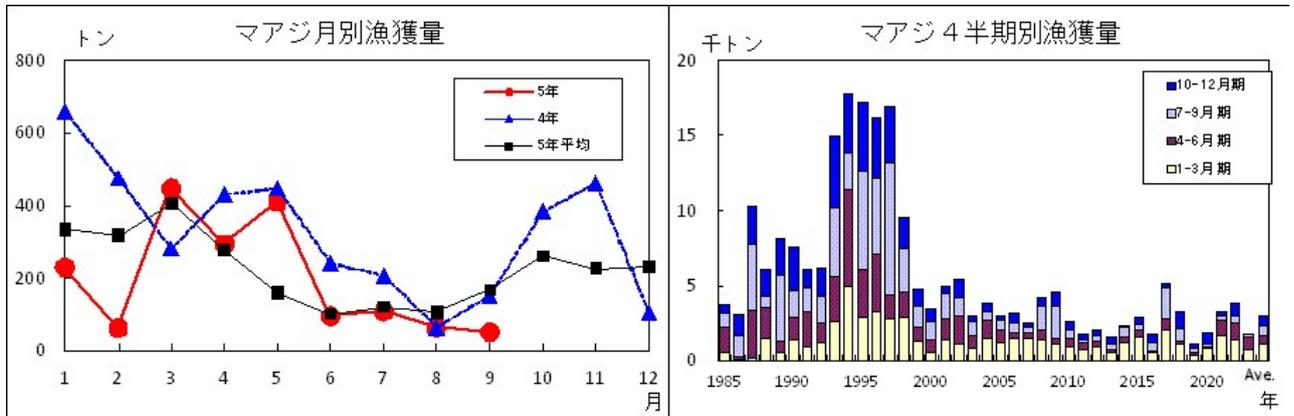


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2023年9月20日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、1978年の160万トン进行ピークに年々減少し、1991年には26万トンとなりました。

1993年から増加に転じ1997年には85万トンとなりましたが、2002年には28万トンまで減少しました。

2006年に65万トンまで増加したあと減少傾向となり、2021年は44万3千トンとなりました。

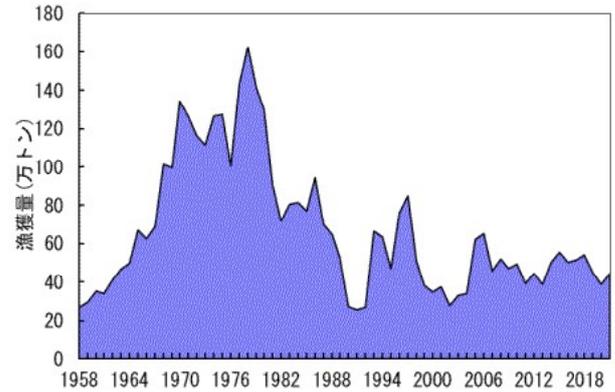


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 県内の2023年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、期間を通じ、甑東でゴマサバ豆（0歳魚：2023年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、7月に津倉瀬、屋久島南、宇治でゴマサバ中、中小（1～3歳魚：2020～2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。また、8月は種子島東でゴマサバ中小主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で693トンの水揚げで、前年の18%及び平年の20%でした。

3. 県内の2023年10～12月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ豆（0歳魚：2023年生まれ）、ゴマサバ中、中小（1～3歳魚：2020～2022年生まれ）

来遊量：前年，平年を下回る。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に漁獲の主体であった0～3歳魚が今後も漁獲の主体となると予測され、前期における中型まき網の漁模様から、前年，平年を下回ると考えられます。

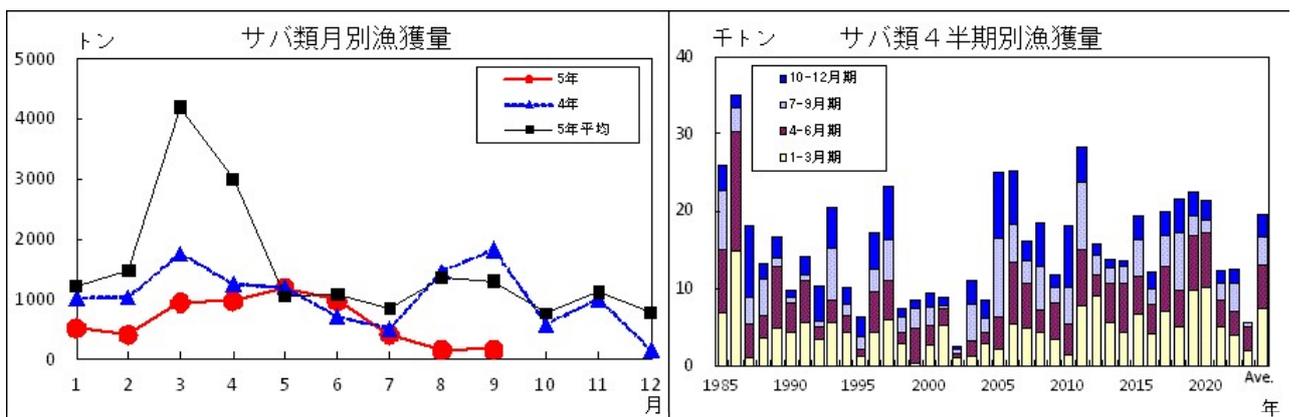


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2023年9月20日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、1950年代から1960年代にかけての不漁期の後、1973年頃から増加の傾向が見られ、1988年には449万トンまで増加しました。

1989年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、2002～10年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、2011年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、2013年以降は20万トンを超える漁獲が続き、2021年には68万2千トンとなりました。

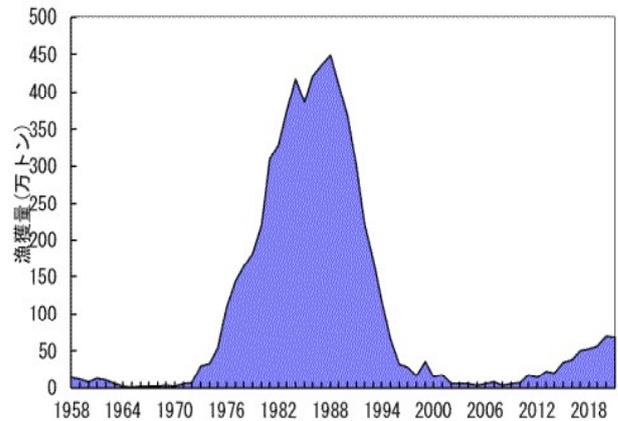


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の2023年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、期を通じて甑東で大規模な漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、7月に野間池沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中～小羽（0歳魚：2023年生まれ）主体に4,088トンの水揚げで、前年の4,481%及び平年の1,253%でした。

北薩海域の棒受網では、中～小羽（0歳魚：2023年生まれ）主体に428トンの水揚げで、前年の269%及び平年の736%でした。

3. 県内の2023年10～12月期の見とおし

漁獲主体：中羽（0歳魚：2023年生まれ）主体

来遊量：前年・平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過から予測しました。

今期の漁獲主体となる中羽（0歳魚：2023年生まれ）は、まき網、棒受網ともに好調な漁獲が見られており、今期も漁場への来遊が期待されることから、来遊量は前年・平年を上回ると考えられます。

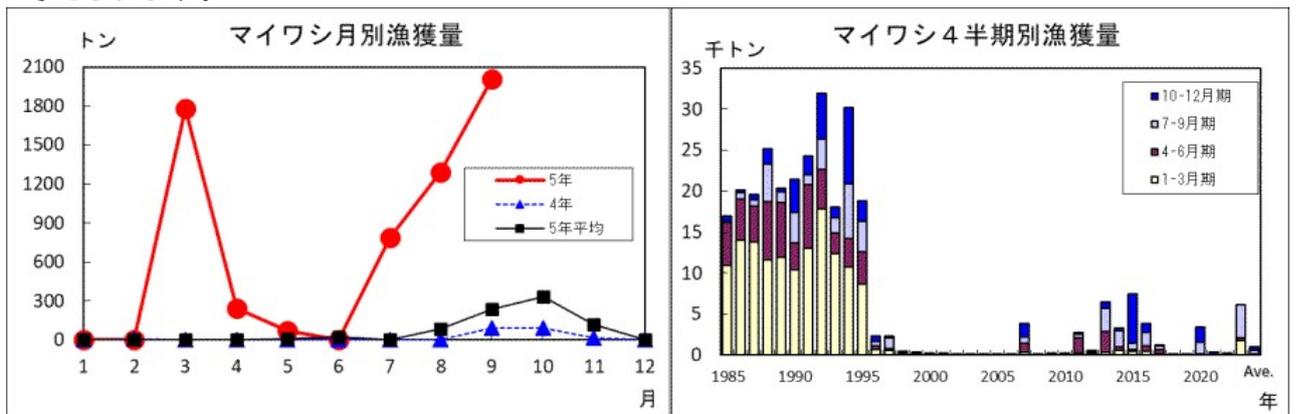


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2023年9月20日までの水揚量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、1950年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、1994年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ2000年には2万4千トンまで減少しました。

2003年以降は再度増加傾向に転じ、2016年は9万8千トンで1958年以降では最高の漁獲量となりました。

2021年の漁獲量は2020年よりも3万トン増加し7万3千トンとなりました。

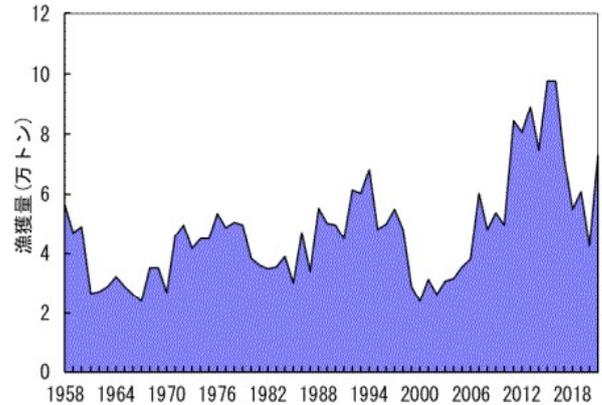


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

年

2. 県内の2023年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、期を通じて甌東で大規模な漁場が、9月に天草西沖、串木野沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、中羽（0歳魚：2023年生まれ）主体に1,362トンの水揚げで、前年の163%及び平年の143%でした。

北薩海域の棒受網では、小羽（0歳魚：2023年生まれ）主体に344トンの水揚げで、前年の34%及び平年の37%でした。

3. 県内の2023年10～12月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽（0～1歳魚：2022～2023年生まれ）

来遊量：前年を上回り、平年並み

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期の漁況を基に予測すると今期の来遊量は、前年を上回り、平年並みと考えられます。

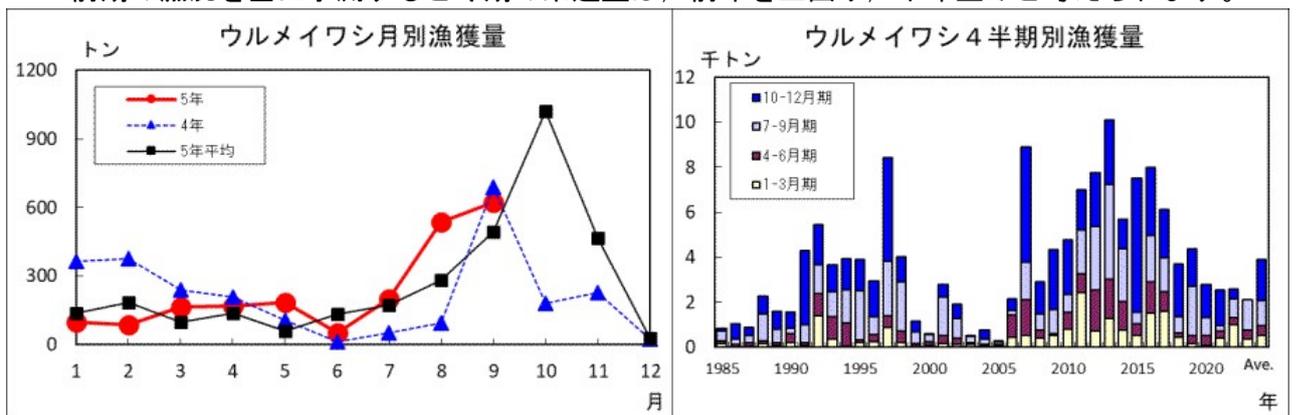


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2023年9月20日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、1973年まで30万トン台で変動していましたが、1974年以降減少傾向となり1979年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、2003年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、2021年は11万9千トンとなりました。

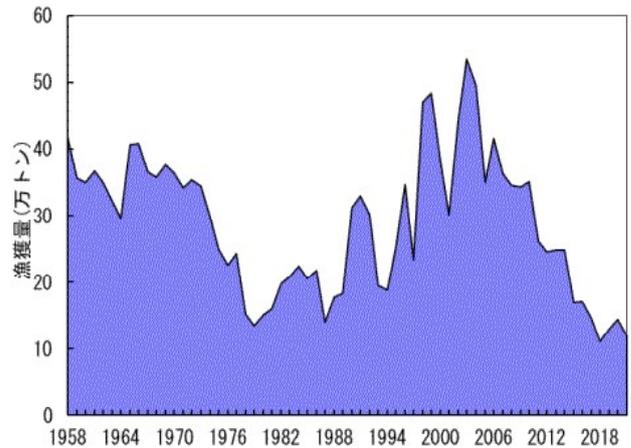


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の2023年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、期を通じて甑東で大規模な漁場が、8月に八代海、9月に天草西沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、中～大羽（1歳魚：2022年生まれ）主体に557トンの水揚げで、前年の265%及び平年の124%でした。

北薩海域の棒受網では、中羽（0歳魚：2023年生まれ）主体に23トンの水揚げで、前年の41%及び平年の20%でした。

3. 県内の2023年10～12月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽（0～1歳魚：2022～2023年生まれ）

来遊量：前年を上回り、平年並み

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過から予測しました。

前期の漁況を基に予測すると今期の来遊量は、前年を上回り、平年並みと考えられます。

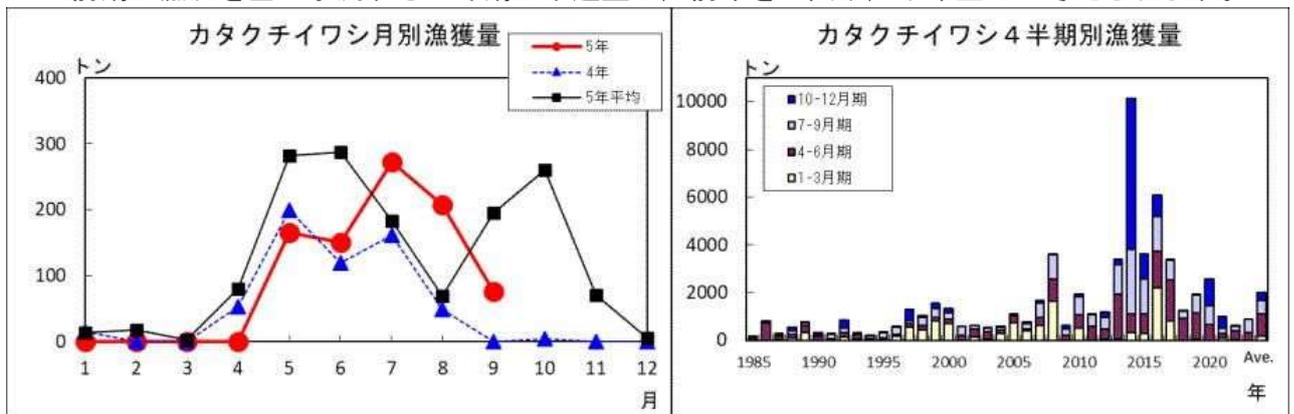


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2023年9月20日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

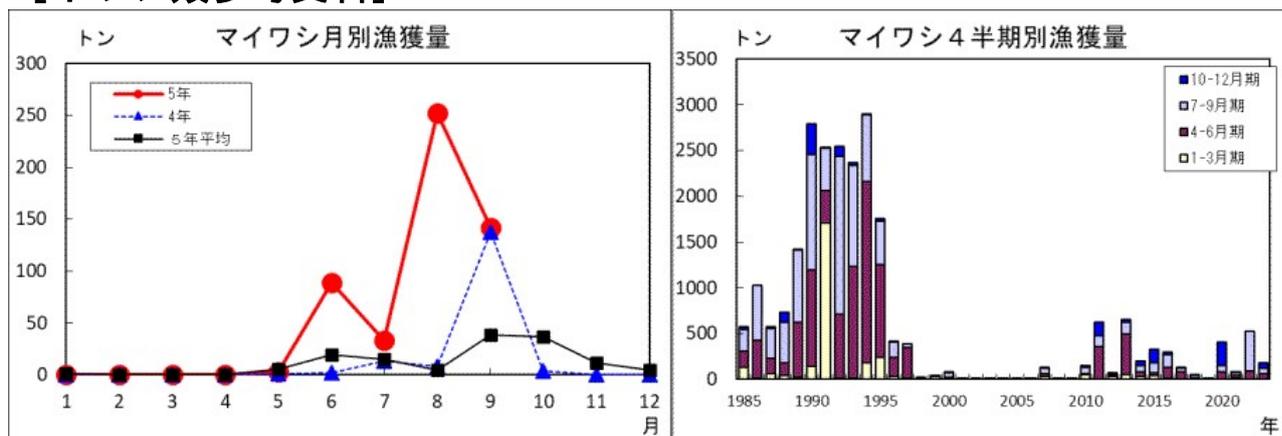


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

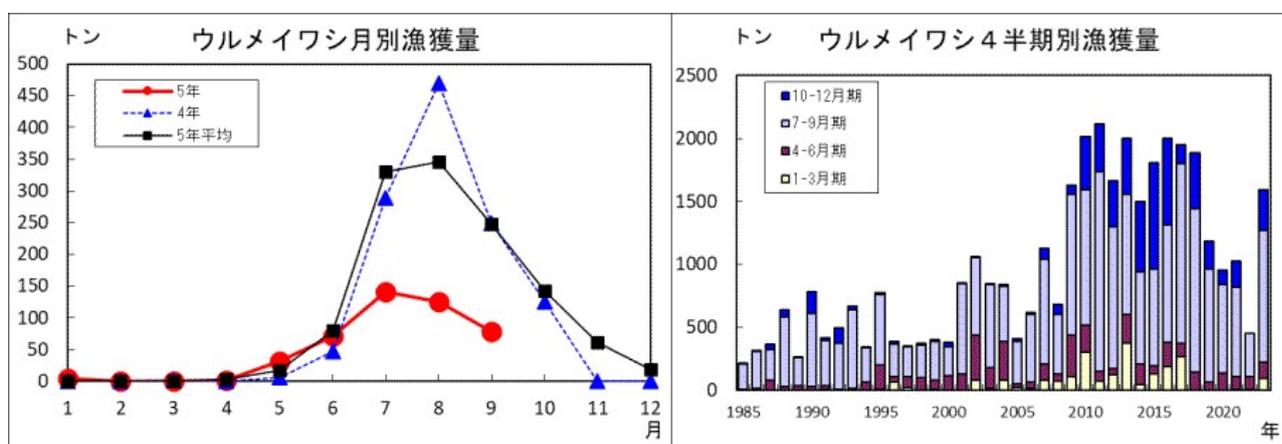


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

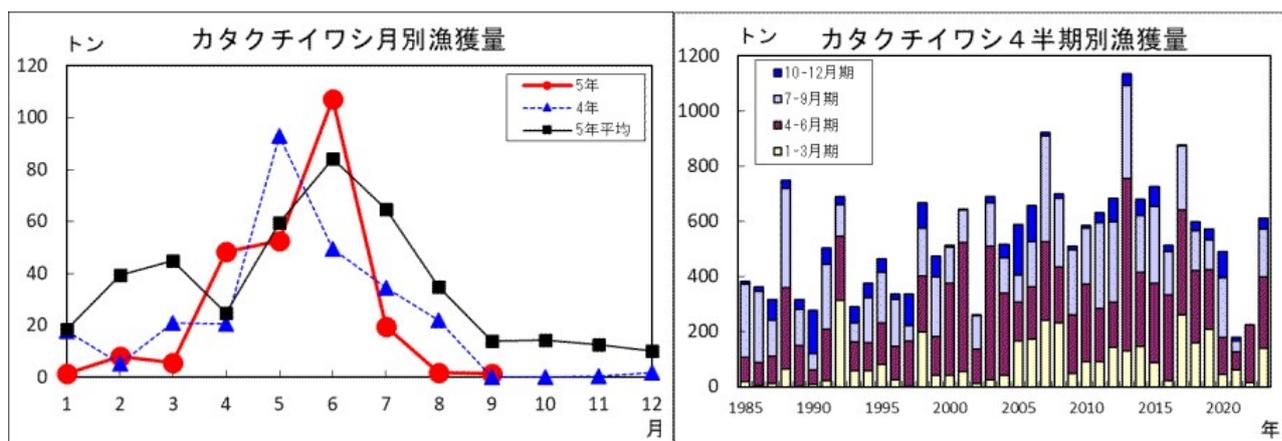


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 2023年9月20日までの水揚量を使用

[ムロアジ類 (参考：漁況経過のみ記載)]

〈クサヤモロ、ムロアジ、モロ (水産技術開発センター調べ：4港計)〉

1. 経年経過

ムロアジ類の漁獲量は、1990年の21,700トン进行ピークに急減し、1994年以降は1,500トンから5,000トンの間での推移しており、2022年は2,708トンとなりました。

2. 2023年7～9月の漁況の経過

4港計のまき網では、種子島東でクサヤモロ中、中小主体の漁場が形成されました。期全体で58トンの水揚げで、前年の42%及び平年の27%でした。

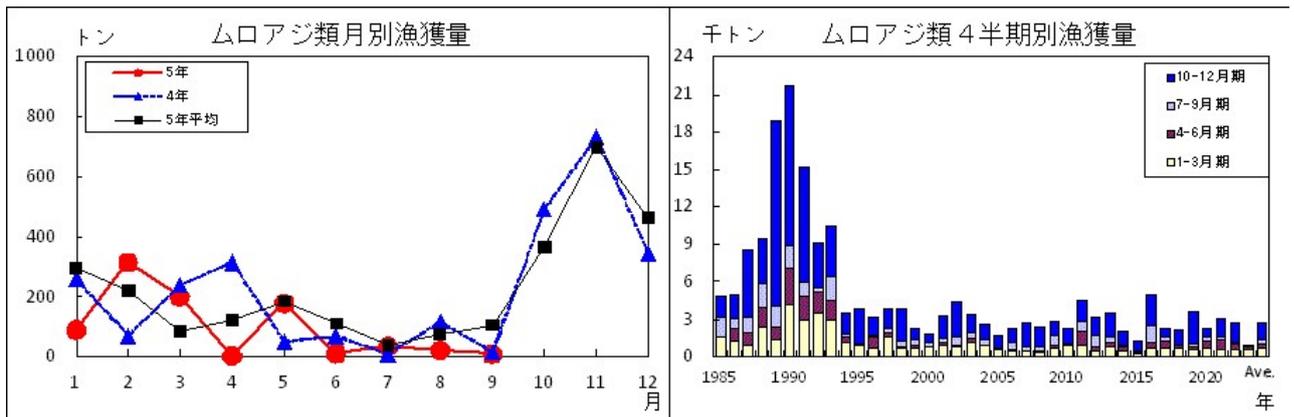


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2023年9月20日までの水揚量を使用

〈オアカムロ (水産技術開発センター調べ：4港計)〉

1. 経年経過

オアカムロの漁獲量は、1989年の5,300トン进行ピークに一旦減少し、1995年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となり、2007年には700トンとなりました。2008年に2,300トンまで増加した後は700～2,400トンの間で推移していたものの、2022年は195トンと減少しました。

2. 2023年7～9月の漁況の経過

4港計のまき網では、屋久島南でオアカムロ中小主体の漁場が形成されました。期全体で31トンの水揚げで、前年の43%及び平年の27%でした。

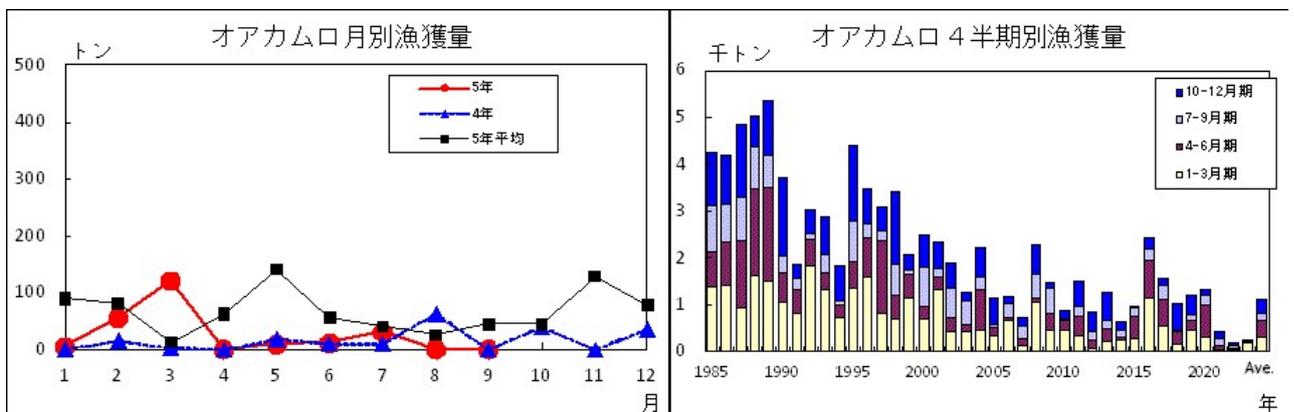


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2023年9月20日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年経過

マルアジの漁獲量は、1987年から1989年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、2000年から2003年に再度ピークを迎え2003年には3,150トンと最高を記録しましたが、2004年以降は低調に推移し、2022年は217トンとなりました。

2. 2023年7～9月の漁況の経過

期全体で7トンの水揚げで、前年の14%及び平年の16%でした。

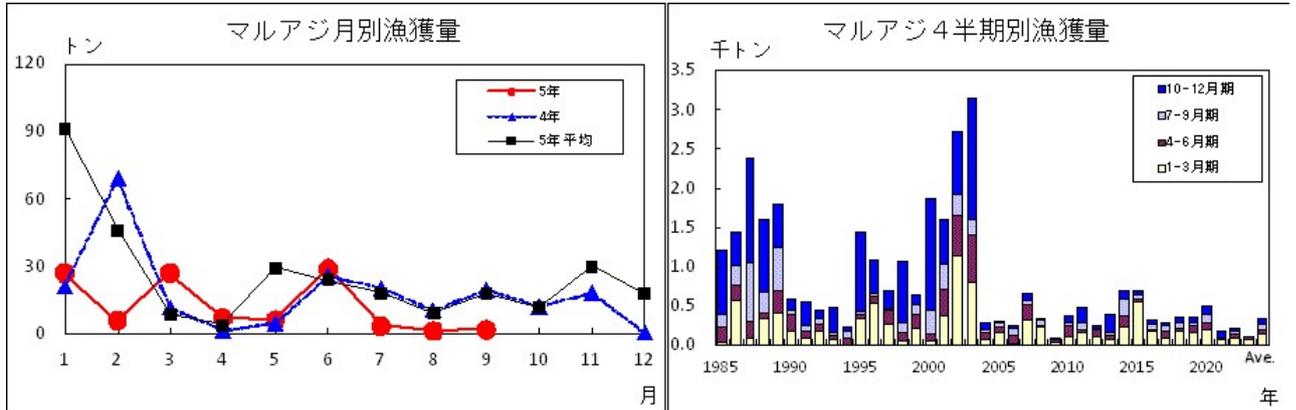


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2023年9月20日までの水揚量を使用